様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２１３９

研究課題名（和文）14世紀における認識理論の諸相

研究課題名（英文）Various Aspects of the theory of cognition in the 14th Century

研究代表者
辻内　宣博（TSUJIUCHI, Nobuhiro）

早稲田大学・商学学術院・准教授

研究者番号：５０６４５８９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，ドゥンス・スコトゥス，オッカムのウィリアム，ジャン・ビュリダン，ニコール・オレームという代表的な14世紀のスコラ学者たちの認識理論がもつさまざまな局面に焦点を当てて，その構造分析を行った。その結果，14世紀の認識理論の特徴として，以下の二点が析出された。（1）物事の普遍的な側面に着目する「全体論的哲学」が，物事の個別的な側面に着目する「個体論的哲学」へと根本的に変容した。（2）アリストテレス主義的な枠組みの中で構築されていた認識理論の在り方が，その枠組みを拡張して超えていこうとしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中世スコラ学における14世紀の特殊性を指摘する研究書は，近年徐々に増えつつあるが，個別的な論文において各神学者や哲学者の個別的論点として指摘されることが多い。しかし，本研究は，14世紀の代表的な神学者と哲学者を，認識理論という一つのテーマの下で大局的な歴史的視点から分析した点に，学術的な意義があると考えられる。他方で，14世紀の認識理論が非常に複層的で多面的な理論的枠組みを生み出していることを提示したことは，一般に理解されている中世スコラ哲学への平板的な見方に対して一石を投じるという意味で，社会的意義が見出される。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we focused on various aspects of the theory of cognition by representative 14th century scholastics such as Duns Scotus, William of Ockham, Jean Buridan and Nicole Oresme, and analyzed the structure of it. As a result, the following two points were deposited as the characteristics of the theory of cognition in the 14th century. (1) The “holistic philosophy” that focuses on the universal aspects of things has fundamentally transformed into the “individualistic philosophy” that focuses on the individual aspects of things. (2) The mode of the theory of cognition which were constructed within the Aristotelian framework has been going to extend and go beyond that framework.

研究分野：西洋中世スコラ哲学

キーワード：認識理論　知識論　魂論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究を開始した当初は，13 世紀の神学者や哲学者の認識理論を典型的なスコラ哲学の理論として，古代哲学や近世哲学との歴史的な繋がりを模索する研究書が，主に海外において，世に問われていた。その後，本研究の主題的な対象であるドゥンス・スコトゥス，オッカムのウィリアム，ジャン・ビュリダンやニコール・オレームといった 14 世紀の神学者や哲学者の認識理論について，それぞれの人物毎の個別的な論点に焦点を絞った研究が少しずつ現われてきたが，しかし，彼らが織りなす 14 世紀全体の思想状況については，漠然と把握されている状況が続いていた。このような状況において，それぞれの人物の認識理論の全体的な構造を構築し，それらを比較検討することによって，14 世紀全体の知的状況を明らかにできるのではないかという見通しのもとで，本研究を計画した。

２．研究の目的

本研究では，14 世紀の代表的な神学者・哲学者である，スコトゥス，オッカム，ビュリダン，オレームという四人の人物の認識理論の全体的な構図を明らかにすることを主眼とした。その目的を達成するために，認識理論を［1］「外部感覚による認識」（いわゆる五感による認識であり，魂／精神／心と物理的世界とが最初に出逢う場として位置づけられる），［2］「内部感覚による認識」（外部感覚の一次情報を加工する表象・想像・記憶といった能力による認識であり，知性認識の前段階として位置づけられる），［3］「知性による認識」（人間にしかもつことのできない認識の領域であり，普遍的な知の形成が行われる場として位置づけられる）という三つの局面に分けて，各々の分析を行った。そして，最終的には，単に一般的な「知識」形成のプロセスに留まることなく，確実性を備えるために厳格な諸条件が要求される「学問的知識」を形成するに至るプロセスについて，明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

研究開始当初の学術的背景を踏まえ，一定程度，個別的な論点についての研究蓄積があるスコトゥスとオッカムについては，二次文献の詳細な検討に依拠しつつ，中心的には，まだそれほど蓄積が多くはないビュリダンとオレームの認識理論の研究から着手した。とりわけ，ビュリダンに関しては，当時出版されたばかりの『自然学問題集』の精密な検討を土台として，また，オレームに関しては，『デ・アニマ問題集』全体を通じた心身問題理論の構築と認識理論の構築とを行った。他方，スコトゥスとオッカムに関しては，まだそれほど蓄積のない神学的観点からの認識理論の拡張を見るために，両者の原罪論を起点として，両者の独自性を抽出する方法論を採用した。

４．研究成果

（1）14 世紀の認識理論に共通する特徴として，「知性による個物の認識」の理論化への取り組みがあることを抽出した。このことは，スコトゥス，ビュリダン，オレームに関しては，アリストテレスの『魂について』という同じ書物に関する『問題集』に基づいて析出された。とはいえ，その析出の論理は三者三様であり，その意味で，各神学者・哲学者の理論的布置の独自性もまた明らかとなった。

（2）感覚知覚論の観点からは，スコトゥス，ビュリダン，オレームに関しては，基本的には，アリストテレス的な枠組みが維持されつつも，しかし，そこから超え出ていく理論的な拡張が，それぞれの仕方で見出された。また，オッカムに関しては，とりわけ感情の理論との関係において，感覚的欲求の感情が身体の性質へと還元されるという，当時としてはかなり珍しい唯物論的なアプローチを観てとることができた。

（3）原罪論という神学的な議論を起点として，人間の自然本性的な存在論および認識理論について，スコトゥスとオッカムの理論を精査した。その結果，両者の原罪論の相違は，両者の認識理論の基本的な視座の特徴を浮き彫りにすることとなった。そのことは，同時に，両者の各々の視点における哲学と神学との整合的な関係性をも浮かび上がらせることになった。

（4）人間の知性的魂と身体との関係性について，両者は本来的に複合する仕方でしか存在しえないというアリストテレス的枠組みで理解すべきか，それとも，知性的魂はそれ自体で存在しうるという神学的な枠組みで理解すべきか，という，いわゆる心身問題に関する論点について，ビュリダンは，前者の枠組みで理解しようとする姿が確認できたが，他方で，オレームは両者の混合というアンビバレントな理解を提示していた。しかし，「感覚的魂」と「身体」の複合体としての実体に，新しい種として，いわば「人間もどき」の動物を想定するという議論があり，でき

る限り，論理的な整合性をはかろうとしていたオレームの姿勢も観てとることができた。この点は，他のスコラ学者たちには見られない思考の線でもあった。

（5）最終的には，スコトゥス，オッカム，ビュリダン，オレームの心身論と認識理論に関して，全体を整理した論考を発表する予定であったが，コロナ禍の影響もあり，この計画については，若干遅延気味の状況にあるが，2021 年度中には，一定の形で発表したいと考えている。

（6）今後の展望として，14 世紀の認識理論全体の整理が終われば，そこには，13 世紀スコラ学においても現代の心身問題や知識論においても見られない，多種多様な理論が看取されるだろう。このことは，西洋中世スコラ学が決して一枚岩では収まりきらないものであることを明示し，また，現代の心身論や知識論において見落とされがちな論点を提示することにも繋がっていくことが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 辻内　宣博	４．巻 108号
２．論文標題 政治学と倫理学が交錯する地平――トマス・アクィナスとジャン・ビュリダン――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 フィロソフィア	６．最初と最後の頁 73-98頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 ドゥンス・スコトゥスにおける自然神学と形而上学
３．学会等名 第78回日本宗教学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 ニコール・オレームにおける魂の存在論の構図――『デ・アニマ問題集』第2巻および第3巻
３．学会等名 第259回京大中世哲学研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 政治学の部分としての倫理学の在り方――トマス・アクィナスとジャン・ビュリダン
３．学会等名 2019年度 三田哲学会 哲学倫理学部門（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 オッカムのウィリアムにおける原罪論
３．学会等名 第77回日本宗教学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 神の自由意志の絶対性――オッカムのウィリアムにおける原罪論から
３．学会等名 第67回中世哲学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 人間の幸福はどこで成立するのか――トマス・アクィナスとジャン・ビュリダン
３．学会等名 2018年度　早稲田大学哲学会　特別講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 ガブリエル・ビールにおける原罪論
３．学会等名 第76回日本宗教学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 ドゥンス・スコトゥスにおける原罪と倫理
３．学会等名 上智大学中世思想研究所講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 辻内　宣博
２．発表標題 ドゥンス・スコトゥスにおける個別的思考――『デ・アニマ問題集』からの視点
３．学会等名 第246回京大中世哲学研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 伊藤　邦武、山内　志朗、中島　隆博、納富　信留（責任編集），辻内　宣博（共著）他9名	４．発行年 2020年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 288（担当：159-179）
３．書名 世界哲学史４（担当：第7章 西洋中世哲学の総括としての唯名論）	

１．著者名 中野　隆生、加藤　玄	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 388（担当：90-95）
３．書名 フランスの歴史を知るための50章（担当：12 神学vs.哲学――世界の永遠性をめぐる13世紀パリ大学での論争）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関